日本共産党
西宮市会議員団ニュース

（発行）日本共産党西宮市会議員団（2024.4.24　No.775）

西宮市六湛寺町 10-3（西宮市議会内）
TEL・35-3368　FAX・22-7815
Eメール・nmc30547@nishi.or.jp
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　http://nishinomiya.jcp-giin.net/

2024 年度がスタートました。今年は桜の開花が遅れたおかげで、入学式は桜をバックに写真撮影できたと聞き、うれしい気持ちになりました。希望ある西宮市の街づくりに向け、日本共産党西宮市会議員団３人で力を併せてがんばります！ご支援をどうぞよろしくおねがいいたします。

市は単年度で 40 億円以上の収支改善をめざすとした「財政構造改善基本方針」の具体化の提案が始まりました。市民サービスの低下につながらないか、注視し対応してまいります。

能登半島地震から３か月半が経過しました。芦屋市議団と合同で能登へ支援に行ってきました。復旧の遅れ、支援の手がまだまだ必要です。　大阪関西万博へ子ども無料招待の動きに対して、市へ申し入れを行いました。

危険な場所（万博会場）に子どもを「招待」動員しないで！

☆市長・教育長へ申し入れしました

日本共産党西宮芦屋地区委員会と党西宮市会議員団は、４月 22 日、兵庫県が発表した「公民連携による万博子ども招待プロジェクト」に関し、石井市長、藤岡教育長と懇談しました。

・学校行事で万博に「招待」動員

「学校行事として希望する県内の学校へチケットを配布」するというもの。学校行事となれば、全員参加ということに。

・命を危険にさらす万博会場

会場の夢洲は、ごみの最終処分場となる場所で、有害物質を含む下水・汚泥、猛毒のＰＣＢが詰まった土袋数千を地中に埋めている地域です。
３月末にはガス抜き管に引火し、爆発事故が起こっています。

・問題だらけの「招待」

子どもの参加見込み１日 1.4 万人に対し、団体休憩場所は 2000 人規模で昼食場所は足りません。避難計画も定まっておらず、命と安全の保障がない危険な場所に児童生徒を動員するようなことのないよう、「子どもの命第一」という立場で対応するよう申し入れました。
久保田けんじ県会議員も同席しました。

石井市長と藤岡教育長へ申し入れ
庄本けんじ団長
野口あけみ幹事長
三好さつき市議
久保田けんじ県議

日本共産党西宮芦屋地区委員会
日本共産党西宮市会議員団

兵庫県が実施するとしている「公民連携による万博子ども招待プロジェクト」に関する申し入れ

兵庫県は、さる３月１１日、「大阪・関西万博」に県内の小中高校生最大５６万人を公民連携により、無料招待するプロジェクトを発表しました。
「大阪・関西万博」については、安全面を見ただけでも、さまざまな懸念が次から次へと浮上し、危険な場所に子どもを連れていくことへの不安が強まっています。

会場となる夢洲は、廃棄物の最終処分をする場所で、ダイオキシンなどの有害物質を含むゴミの焼却灰や下水汚泥が持ち込まれ、たえず有毒ガスや可燃性ガスが発生しています。３月２８日には爆発事故が起きるなど、命の危険性が顕在化しました。災害時の避難計画も、立てようにも立てられない危険な場所との指摘もあります。

このような危険な場所に、子どもたちを「無料招待」で動員するようなことは、到底、許されるべきものではありません。

また、さまざまな問題点も浮上しています。たとえば、パビリオンを自由に選ぶことができない。日時も自由には決められない、万博駐車場から入口まで１キロほど徒歩移動しなければならない。児童・生徒の参加見込みは一日当たり１．４万人と推計されるが、昼食をとる団体休憩所は２０００人までとなっている。いつ下見ができるのか分からない。医療的ケアが必要な児童への対応が示されていない。こうした数々の重要問題が、各方面から指摘されているところです。

西宮市と教育委員会にあっては、こうした危険な現状と問題点を踏まえ、「子どもたちの命と安全第一」という立場を堅持し、対応されることを強く申し入れるものです。

以上

能登半島地震から3か月半
被災地の状況は

元旦に発災した能登半島へ、日本共産党芦屋・西宮市議５人で支援に行ってきました。４月１５日～１７日、カンパしていただいた支援金で米やサランラップ、生理用品など物資を購入し車に詰みこみ羽咋市にある共同支援センターを目指しました。道路の損壊のひどい箇所が多くあり、家屋や建物の解体も全く進んでいない状況に驚きました。万博の建設を急ピッチですすめるのに、過疎地の復旧は後回しでいいのかと怒りが湧きました。今後も被災地に心を寄せて、支援の継続を行ってまいります。みなさん、引き続きのご支援をよろしくおねがいします。＊今回の活動に関して、レンタカー代、宿泊費などは自費で行いました。

瓦が有名な古い家屋はつぶれたまま

横倒しになったままのビル

一面、焼け焦げたままの輪島朝市

七尾市の仮設住宅へ物資支援

羽咋市の共同支援センター（芦屋市議団と）

４月１５日から１７日まで、西宮・芦屋の党議員団５人で能登半島地震の被災地支援へ。

・１日目

かほく市の民宿を拠点に。川島市議の実家の内灘町へ。河北潟を干拓した宅地が液状化で隆起し、電柱は傾いたまま。夕暮れでしたが、灯りがともらず、時間が元旦のまま。液状化の調査のために修繕などが手付かずと聞きました。

・２日目

羽咋市の共同支援センターへ。支援物資と義援金を届け、七尾市の仮設住宅２か所へ、センターに寄せられた農民連や全国の仲間からの物資を届けました。仮設住宅には、入居して数日の方も。物資を届けながら、状況や要望をお聞きしました。「こんなにもらっていいんですか」と遠慮がちに言われ、「不便な避難所生活からやっと仮設に入居したが、２年後の退去後が心配」といった声や、家屋判定に納得できないでいるが、手続きが煩雑なようで、不服申請を諦めているとも話されました。１人の男性は高齢の親を連れて来れず、施設に預けてきたと話され、ご自身も病気を抱えておられましたが、「久しぶりに話をした。元気がでてきた！」と訪問を喜んでくださいました。まだ入居者同士の交流もみられず、孤立しないかが心配です。

・３日目

民医連の輪島診療所で炊き出しが予定されており、センターからおよそ２時間かけて支援物資を運びました。診療所は患者さんで満員。民医連からも支援にかけつけておられ、全国から集まる支援に感動！連帯のエネルギーを感じました。

全体を通じて、被災地につながる「のと里山海道」の復旧は何とか進んでいるものの、倒壊した住宅などは殆どが手付かずのまま。重機などが入っている様子も少なく、復旧はまだまだという感じでした。もともと過疎の地域です。行政の職員も減らされてきたようです。

阪神淡路大震災を経験した私たちとして、被災地に心を寄せ、引き続き支援の手を緩めずに行ってまいります。

支援の手はまだまだ足りません。引き続きのご支援をよろしくおねがいします。